

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2019. 7



令和元年7月1日発行(毎月1回1日発行)第67巻第7号

No.734

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下して北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇一九年七月号 (通卷七三四号)

◇今月の二十首詠……母

本多キミ子 2

■作品

市原志郎・磯田ひさ子他

4

A

若松喜子他

20

B

脇田智子他

54

C

芦田房子他

68

A

杉本博子他

82

■オリーブ集

河上悦子・国原喜美子他

46

◇今月の二人

森田孝子・永江幹雄

16

香川進の生きものの歌 9

田土成彦 14

■岩井久美子歌集『峠のうた』批評

虹の残像―岩井久美子『峠のうた』の世界

38

『峠のうた』私見―やわらかな淡彩の叙情―

松田愼也
田土成彦

■小西美智子歌集『白樺春楡』批評

樹の声を聴きながら

42

黄の色のシヤツ

磯田ひさ子
三好聖三

香川進師つれづれ 2 ―「地中海」の創立 佐久間 晟 15

私と短歌との出会い (203) 増田美千子 19

■遊覧寄港 (夢を旅した少年「アルケミスト」) 小原香里 67

■歌壇月旦 玉井綾子 73

基本的歌壇と自己責任

◇シルクロード・カフェ (責任編集) 木村文子 52

■五月号作品批評 福田庸子・片岡邦子 74

A……………梅本武義・上林節江

B……………茂木 斌・深井喜久代

C……………市原やよひ
オリーブ集…浜谷久子

今月の二人・作品評 久我田鶴子 18

最近の歌誌より [編集部] 99

支社・グループ掲示板 (斑鳩グループ) 田口紀久子 98

クリップ……………100 神田通信……………表3

母

本多キミ子

ひび割れし土に覗ける芋の芽の今ぞと緑貯たくはへ始む

カラオケの歌聞こゆるとふ隣人に音量少し落として開催

横ざまに降る雨受けて菜園のオカノリ三メートルの茎は斜に立つ

生ごみを畑に埋むるわれ待つやカラスは屋根に含み鳴きする

耕せば地虫ねらひてハクセキレイジョウビタキ来て視界を動く

カナブンの幼虫の害多けれど鳥に食はるる見れば切なき

長靴の土を振り出し片足に立つこと叶ふ事を喜ぶ

入院の仲間にメール返信はカラメール可と送信ボタン

昭和二十一年生まれ。
 桃原邑子に師事。
 「沖繩の会」所属。

集ひたる仲間の話題老病死わがものとして熱く交はしぬ

生き甲斐と九十媪は曲がる背にグラウンドゴルフ今日も出席

急ぐなと仲間の励まし受けながら球のあと追ふ九十媪

集合写真土産に母を喜ばせむと孫子十二人集まり来たり

九十六の母はベッドに再会を待ちてゐたるや顔輝かす

許されし帰宅喜ぶ母なれば三泊四日の介護尽くさむ

母よ立て抱へ踏ん張るわが足の絶え絶えにして介護の未熟

トイレへと母と体をつにし汗をかきつつセンチを刻む

寝返りもままにならざる母なれば襤褸替へるも腰筋たのみ

ともかくも痛きを言はぬ母なれば良しとす会話の叶ふもうれし

施設へと帰る日母は車椅子に再会何時と涙ぐみたり

又帰宅できると母を励ませど新幹線に思ひは深し

作品 A

市原志郎

令和

・萬

昭和から平成を経て生きて来し我にもありぬ一つの思い
 今まさに令和となれる今日一日静かに昼のめしを食いおり
 やがて馴染むであろう令和という文字を書きつつ夜を過ごしぬ
 だんだんと親しみて来し「令和」の文字今日も何度か書きて見ており
 平成の終わる日痛む齒を庇いつつ食む好きな竹の子
 令和という文字は何処でも大きくて太くてそしてあらゆる所に
 平成の終わる日我は生きているぞと寝返りを打つベッドの上で

磯田ひさ子

夕映え

・森

エクスプレスの駅の「みどり野」「大たかの森」敷設のために失ひしもの
 どちらでも良しと思ひぬ「ばんばく公園」を「わんばく公園」と眺み間違へて
 平成に生れたる都市の「みらい平」「みらい野」永久に未来のままか
 平成の置き土産かな駅の名も新都市の名もひらがな多し
 ちちははの墓にいつまで行けるやら春の花々けふ携へて
 終りなど思はざりしよふるさとより帰る電車の窓に夕映え
 哀しとも寂しともちがふ利根川の川いつばいに夕光満ちて

市原やよび

菜の花

・萬

冷蔵庫の中に花咲く菜の花を花瓶に挿せり夜半というのに
 さくら咲く春の休みの校庭に少年野球の声の響きて
 珍しき種類にあらん車椅子の夫と暫しを校談義す
 詰襟の第二ボタン無くなりて卒業式の孫帰りに来り
 踊り子草おお犬ふぐり花咲けば残し置きたり庭の草取り
 大学生になりし女の孫初めての帰省に少し背のびしており
 行けずとも誘いの電話くれし友温かき声抱きて眠る

朝井恭子

花水木

・森

公園の隅に咲きいる花水木真白き花の暮れ残りいる
 何も彼も初めてずくめの一年生背のランドセルも道草の道も
 マンションのペランダに泳ぐ鯉のほり酸欠ならん尾を垂れており
 初夏の猩猩木の赤き色うすれて若葉の緑つやめく
 物を書く机の上にも山野ありと詠いし友の歌口ずさむ
 子と二人連れ立ち来たる夫の墓先ずは一杯のコーヒー献ず
 昨夜の雨に濡れたる夫の墓を拭く在りし日のごと白きタオルに

大 浪 美 雪

ハルイチバン

・森

単線の小湊線はごっこんごとん窓は全開風の吹きくる
旨き香の焼イモ売りの乗り込めば見知らぬ同士笑顔となりぬ
菜の花と桜の迫る踏切をジャリ満載のダンブ往き交う
放棄田を菜畑にかえ青年は油を取るとつとつと言う
丈高き菜の花のもと香にむせたりこんなひと日のあつてもよいか
花季に予約の菜種油「ハルイチバン」黄金色なり草の香のする
届きたる菜種油に貼られる種蒔き助っ人募集のしらせ

奥 田 清 和

徳 利

・大

酒どころ池田にとなれる村なればわれも醸さむとはじめしわが祖
速き祖の酒屋の徳利丹波焼き今に残るわがたからもの
小さき襟のかたみとともに残りたる徳利に浮かぶ半町の竹清はなぢよ
ノートルダムのステンドグラスに浮かび出づ妻との観光夢のまたゆめ
わが門に咲きさかるらし花水木見れども見えす目を凝らすなり
ももしきの大宮人はいとまなきや観光客に片言の弁
数ふれば付き合ひ長き饅頭商、老舗の酒屋、伊勢の魚屋

奥 田 陽 子

夜のさくら

・羊

ようやくに生れ来し児よ満開のさくらもわれに遠く過ぎつづ
もう笑うもう見つめくるみどり児のただに小さく生れきて三日
欠伸する 人間の原型をみるようなみどり児と居る生まれて三日の
驚のしきり鳴くとぞその窓へちいさき体いできてゆけり
泣きいたる児も眠りしか夜のさくらしろじろひらくかたわらを通ぐ
生れ来しばかりの児よといたきたるわれのかいなの暖かくあり
生れ来し児に会いきたりさくら花白うつくしき夜道を帰る

小 野 雅 子

四 月

・羊

咲ききりて静止してゐる桜なり花びら一つこぼれては来ず
ひと切れの紅茶ケーキを愉しまむ紅茶にあらず煎茶を淹れて
お隣の生活ボタン交りしか朝刊をとる時間がちがふ
ブローチの二センチほどの高さなどひとは気にせず我は気になる
手触りのちがふ雑誌のそれぞれに心ひかるる歌のりてゐる
十分の儀式のために着飾りて宮殿にゆく高官の妻たち
見上ぐれば藤咲き満ちて地には白く星のやうなる花垂のはな

菊 地 栄 子

重 き 腰

・湾

鳥帰る団地の沼はしきりにも波立ち荒き西よりの風
雲動く如き野鳥の黒き群れ慶事とも見ゆ凶事とも見ゆ
まだ寒き西の疾風に乾しあげて畳む夕べは澄む心地する
地下鉄のベンチのそばの植物群みどりなれども筋金が入る
またしても焦がす鍋底こそげ居るほんの時間を惜しみしばかりに
ABC二十六文字を読み上げる幼児の歯のことに白しも
誰人もかまってはくれぬ重き腰自ら強いて立たすすほかなし

菊 岡 栄 子

年 の 先 触 れ

・漣

元号は「令和」となれり新しき年の先触れ四月一日
新しき年の初めの手続きに動き出すなり活気に満ちて
街路樹の花染しみに掃宅すも二分咲きなれば期待に副わぬ
施設より一時掃宅に気もそぞろこのひと時の早々と過ぐ
飼ひ猫のマロも老いたり十六歳掃宅の吾を出迎えもせず

木村文子

鍋を取り出す

・羊

心臓は電気信号を受け取って規則正しく動き始めぬ
 どのような治療が見せてくれぬのは我に對する思いやりかも
 〈初号機〉と書かれた車椅子に乗り母還りくるICUから
 幾たびも不整脈を治しつつ生きてゆくらし母の心臓
 病院の人の多さよ誰もかも涙みのなかに静かに座る
 三時間過ぎてても点滴は終わらずに目を伏せ母は疲れを言いぬ
 始まりし介護は食事作りから夕食を終え鍋を取り出す

草刈十郎

春光

・世

福は何鬼とは何かを思ひつつ妻と二人の豆を撒くなり
 坂の町通れば底冷え貼り付いてゐるがに寒き石畳なり
 余寒なほ厳しき夜の熱燭に昭和の残党意気上がるなり
 老いわれと共に朝刊読むごとくはへの来たりてじつと動かず
 小さき池の一隅に身を寄せあへる金魚の赤き寒さ身にしむ
 風よりも水音に春あふれるて見はるかす野に耕人いくつ
 春光にふと軽くなるわが足に速まはりして帰り来たれり

國井節子

手始めに

・春

新しき令和の御代の手始めに古きカーテン取り替へにけり
 新緑の光る五月の空高く雲雀さへづる平城宮跡
 新緑の木ごと葉ごとに色変へて艶めき伸ぶる若きちからよ
 新しい苗をつくるに苗床の細かい土に小粒な種を播く
 連休と関係のなきこの身にも外出はやや控へめにする
 丹精の三つ葉つつじの花の寺こころ豊かに説法を聴く
 辻さんの庭のれんげ草咲き満ちてみつばちてふてふ舞ひ遊ぶなり

小泉泰清

足弱く

・う

足弱くなりしに外出控へての歌詠む業の問を掘り下ぐ
 花冷えの寒き日なれど青空に浮雲ひとひら光をたたふ
 満天の星もありなむ外灯の光に覆はれ霞のかなた
 花乱す小雨に濡れて通院のわれの病名を自覚し直ぐ
 春耕の済みし田圃に泥乾き草もまばらの田の面ひと待つ
 枝先に花芽が宿り花水木ほぐればじむるさくら散り初む
 杉木立竹の林もさみどりに春の里山膨らみて見ゆ

河野繁子

芽吹き

・雁

森づくり事業に伐られしこぶしの木向かいの山のさびしき卯月
 県税を活用しての整備とか桜一木が今年灯さず
 猪や熊おりぬよう間引きせし木木の芽ぶきに鳥美しく鳴く
 やわらかく織き芽だちをお空にひろげる樗息弾ませて
 地下よりの水脈くみ上げ春の日の空に新芽を撒く大げやき
 田に降りて雉の歩める朝なり行き交う車は敵ではなくて
 低空を飛びくる鴉に気づきたる雉はひたひた草むらに入る

小西美智子

農鳥

・大

あお空に羽撃かんとすしるじろと平成名残りの富士の農鳥
 『春雷』が鳴れば浮かび来中学の演じぬままになりし台本
 歩数計回覧まわしし数千歩示せるのみに雨降りやます
 美しき巻きものとなし届きたる歌評の書状ありがたきかな
 白墨でドラえもん絵画にありある路地のゆく手にひろがる夢は
 音もなく着陸したる夫の機に拍手起こりしラストフライト
 上皇ご夫妻お乗せし飛びたるフライトは夫の昭和のとおき思い出

小林能子

TYO演奏会2019

坂上直美

春のホームレス

天

TYO演奏会の案内のここにも五線の爽やかなロゴ
東北ユース一〇七人を背に弾く坂本龍一の「青」 遠く緩なす
TYOのブラームス「田園」こちよく桃源郷の空に広がる
東北のこの八年を見詰めつつ育ちし子らの奏づるクリマ
フィナーレは祝祭か「相馬盆唄」に手拍子も涙溢るるままに
御倉入くるみ銘菓の添へ文は「南会津にまた来てくんつえ」
相馬焼の重ねの縁に花びらをあづけて夕べ ひとりの宴

近藤栄昭

魔女の瞳

福

佐久間 晟

日乗(二三)

湾

一切経山は警戒レベル一 噴煙ばあばあ噴かぬを願う
思い出とおなじ浄土平は五郎太石原発事故後七年の春
樹林抜け日を受く高さに雪ありて雪溪染しむ昔の汗拭く
残雪を三つ登りて酸ガ平 木道となり避難小屋あり
屋根筋へ最後の急登二十分 後は楽よと耐える思い出
頂は月山見えて一切経を収めしところ石塚高し
山頂は会釈で急ぎて五色沼蒼き瞳にはやくあいたし

近藤芳仙

わたる

信

坂出裕子

お豆腐

洛

冬川のしづもる水面はるかより北の鳥きて黄の嘴うつす
旋回をくりかへしては下りる鳥千曲川面の水にうきつく
甲武信ヶ岳の源流のひえ記憶する己が小指に水面をはかる
去年見たる風蓮湖よりわたれるや白鳥の群れ今着水す
きらきらと光る水面に翅やすめ浮く白鳥よ三十の群れ
山の端に入りゆる陽にそまる雲白鳥の翅が反すくれなる
平成を令和へ生きて渡る鳥北の水田へシベリアの地へ

東京の街の片隅あの人は家がないのか坐りこんでる
デパートに三十万の襦袢衣があり公園の隅に襦袢を着た人
ホームレス花見をさせる飲みさしのビール片手にふらつきながら
どこへ行くのどこから来たの襦袢を着て酒を片手に街を行く人
妻や子は親はあったの失くしたの桜の下の襦袢を着た人
はらはらと花びらは散る酔い潰れ倒れこんでる襦袢の人に
私も通り過ぎたわ駅の傍汚れた毛布に坐りこむ人

師郎からの童は今年も花咲けりわがもの顔にわが庭を占め
今頃は何をすべきか定まらず花咲く丘に行くこともなく
なぜ生きていたいのかそれも解らず生きていたただ歌を詠み
時折は孤独の思いになりつつも独りではない傍らには妻も
何もかもぶち開けて生きてゆこう、所詮は何も無いわれゆえに
孫や曾孫を見ていると遂に寂しくなる。何を考えて生きているのか
もうすぐに秋が来る、木の葉が落ちる秋は嫌いだ。なぜ、なぜ

お豆腐を持ちてこの坂のぼることもうあらざらむゆつくりのぼる
五十年買ひ続けたるおとうふは何千丁かこの坂の道
夫と子と子の夫と子が大好きなおとうふがこの世から消えゆく
何事も終りがあるといふことの理屈わかつてゐるのだけれど
シャッターが閉まつたままの商店街よそのことだと思ひをりしが
何よりの御馳走でした出来たてのあのやはらかい絹ごし豆腐
この容器持ちてお豆腐買ひに行くことはもうないきれいに洗ふ

佐藤道子 春

・甲

はじめてのりハビリ終へて車椅子「ああほつとした」夫の一言
 「永遠の眠りの稽古日向ぼこ」他人の句なれど心に沁みる
 枝かげに小さき茜の寶石を今朝見つけたり木瓜にも春が
 いつの間にのびしか百合の細き茎冬のさ中に蕾かかぐる
 季ならぬ百合の蕾の気になりて朝々確かむ早春の庭
 早春の庭に花咲く百合白し無事に開けど未だ寒風
 名も知らぬ小さき黄の花あちこちに荒れたる庭に春を運べる

椎名恒治

改元

・橘

暗れ暗れと空は澄みたり病院の窓に仰きつりハビリを受く
 鉄道の土堤の草々眺めをり痛き腰をもまれつつ
 ベッド食より食堂に変わりたり膳の三度三度運ばるる飯
 たちまちに十日過ぎたり桜咲く林を見下ろしながら
 鉄道の土堤の横腹眺めつつ痛き腰をもまれつつをり
 五月一日暗れつつ桜咲く日改元に逢ふ掲ぐる文字
 痛い腰堪へて窓辺に寄りゆけばしきりに散る花

鈴木結志

暦区切り

・福

日本の古典万葉集からの利用元号「令和」尊ぶ
 大化から数え二四八番目「令和」の令が初採用とす
 ご退位の象徴天皇暦区切り三十余年の平成惜しむ
 象徴の天皇皇后ご退位のお言葉熱く平成たどる
 大菊花勲章むねに新天皇皇后即位世界にひろむ
 十七条憲法定む聖徳太子施策の超えを「令和」にのぞむ
 村夫子などと言わるるほど生きて天皇継承三度重ねる

関根榮子

散策

・埼

迷いたる道にゆくりなく竜の井の清水こんこんと湧きであるなり
 廃寺の境内のあと沼に住む竜神の妻の伝説ありき
 あやふやな記憶をたどる館林の歴史散策二度目なりしが
 人あらぬ田山花袋の記念館中庭の椅子にしばし憩えり
 旧藩主の別邸の前に来てみれば菖蒲田に清々と苗のひろこり
 千匹の鯉のぼりの鯉宙を舞う川面に映る影の泳ぎて
 鷹匠町過ぎたるあたり古民家のピストロみつけ昼食に入る

関根和美

動作

・埼

にぎにぎにグーチョキパーと赤子さえ易き動作に日毎苦しむ
 目覚むれば固まり動かぬ右の手をあためほぐす半時がほど
 苦しきも痛みにもみな意味あると知りつつ時に涙のじむ
 初孫にあるも病むゆえ逢えざりき娘を七七忌の膳に招かん
 心病む娘なれど右手は健やかにお茶をつぎこの日のわれ助くべし
 遺影にも義父はダンディわが母とツーショットよりの半片なりき
 この家をこのまま保つは難からん米蔵文庫蔵昔の木の間

高尾恭子

「なごり雪」

・大

遠つ世の太宰府の梅かおくりくる卯月朔日あらたしき風
 ヒロヒトは遠くなりけり戦争を知らぬ子どものままに逝きたし
 ある日神が人間だったと宣えばオズの眼鏡を青空に放る
 無言歌のように「さよなら」くりかえす季節はずれの雪ふる街を
 なごり雪はこれが最後と口ずさむ頭上に散華の風花うけて
 数えきれぬ零れ桜のしるじろと波間ただようわだつみの声
 押し問答の歳月かさね済州島の桜並木の幹ふとりゆく

高津砂千子

滝

・風

田土成彦

大事

・宙

ひと夜さの雨に散りたる梅の花色の乏しき庭面いろどる
水晶かはたまたビーズか木に花に光る雨つゆ朝の日のなか
小枝にも花にも雨つゆ宿りいる枝垂れ紅梅なかは散れど
雨あがり気のすみわたる三滝道いざ登りゆくうたびとわれら
木隠れの茶店は本日休みなりぬれ縁借りてうた作りゆく
舌ざわり良きわらびもちを喜びし姉の頭ちくる三滝の茶屋に
一の滝二の滝三の滝までをたっぷりながむ時を忘れて

滝田靖子

四月の雪

・新

田土才恵

譲渡

・宙

春浅き風土記の丘の白樫の梢が揺れる手を振るやうに
蓄まだ固き桜の花びらのやうに舞ひ舞ふ四月の雪は
咲き盛り降りそそぎ散り敷きて桜うつとりとただ春が過ぎて行く
蒼穹の高みに白き十字あり飛行機の残し行きたる雲の
話したいことも話したくないことも抱へて静かな空を見てゐる
福音のやうにあらはれ消えて行く蒼穹の白き雲の十字よ
自画自賛自暴自棄そのいづれにも属さず暮らすわれであらうよ

竹下妙子

惜春

・霧

玉井綾子

春の朝

・羊

天空を鳥ゆるやかに舞ひゆけば霧島連山輝きわたる
霧島は端然とあり地上の汚辱ひとよ人世のかなしみ
ふりあふぎ触るれば心ふるへつつコナラの幹は春の朝つゆ
川岸に雪柳さく頃となり淡きかなしみの中にゐたりき
歩みのろく心重たくきよ年より早咲きそめしツツジ花かけ
挽みるしさかり過ぎたる寒椿くれなるの盛り見しは吾のみ
晩春のある宵にして行めば不意に黄わがなる月出でにけり

米国産おにぎりとありよく見れば米・国産と気付く数刻
日のささぬ深海に何を見てゐしやホタルイカの目の舌に転がる
富山湾水深二百メートルに昨夜は泳ぎぬしかこの鳥賊
駐車場を猫よぎりゆく昼下がり都市の荒野は孤独にさせる
わが歌のごと蛸蟪の残しゆく銀の這ひあと生きの証に
布団から両腕を出し眠るまで長けゆく春の疾風を過ぐす
深更に鉛筆五本の芯を研ぎ並べて今日の大事をはんぬ

つづまりは誰のものでもなき地球占有初めしは人類なりき
土地譲渡手続き終えし人の名の奇しくもわれの旧姓にあり
若者のたつての願いとこの地を譲り得しことこの上もなく
爽やかさ残し譲渡の処理終えて去り行かんとすわがふる里を
故郷の景スケッチにとどめてきて心の区切りのひとつとなせり
これよりは追憶のなかにとどめおく耀き増してゆけよふるさと
二百キロ離れし街に嫁ぎきてふるさと淡くあわくなりゆく

春の朝上り電車の下層にはスーツの脚の樹海が生ず
父母が寄らぬこの春咲き残る藤を称える配達の人
朝東風に雨戸開けば満開を過ぎし牡丹の花芯は溼ら
小三で女性の担任 一人称「オレ」へと変わる葉桜の道
春キャベツ 手に包丁に反抗しサラタポウルの空へはみ出す
雑草の根こそぎ抜けぬ穀雨なり土中に残る断面みどり
雨続き玄関の中の鯉のほり子らにまとわれ血色の増す

虎谷信子

令和元年

・伴

天皇様ご退位ご即位 偉き代に、めぐり会ひたる幸せを 祝ぐ
 令和元年 明け初めたれば きらきらと輝く光 家中うるほす
 樹木芽立つ さやけさにほふ朝ぼらけ、令和始まる 五月一日
 「あけてお目出度う」を裡に持ち、衣服正して 赤飯いだたく
 祭り太鼓 はづめる音に練りゆきて、つづく興を 近近をろがむ
 家家の吊り提灯は ともされて 献燈の衆 海道を遠ゆく
 さつき花庭を彩る 祭日に、囀替を手合へる のどかさありき

中島央子

平成晩年

・森

高麗川の流れすくなき橋わたる医療センターの孫に会ふべく
 丘陵を拓きて成れる癌病棟庭の芝生に春の陽は差す
 病院の休日の午後は途切れなく出で入る白きマスクが歩く
 病院の中なるスターバックスに今日よ明日よと桜花待つ
 なんとかなるなるやうになる眠らむか明日はスリランカの紅茶を淹れよう
 難人形・鯉轎出すこともなく災害多き平成華んぬ
 父母と弟逝きし平成やさくらと共に終りゆきたる

中島義雄

梅花の宴

・岡

梅が枝に皁月の空の照り翳り「新蝶の舞ふ」今日の改元
 「鏡前に粉を披き」たる妻香く庭前の梅落果をこぼす
 「一室の裏」に忘るることはもて今日より被く「令和」寿ぐ
 幾年を生きて過ごさむ令和とも「衿を煙霞の外に開かむ」
 老梅のあえかな花散る上枝より「帰る故雁」の列が透くなり
 散りしきる梅の落花を身に纏ひ天平の世の酒宴を懐ふ
 「梅花の詩」くちずさみつつ行めばひとつの時代が過ぎてゆくなり

永塚節子

さくら

・銀

京都駅改札口に待つ友へ昨日別れしごとく手を振る
 車中より指さしあれが畝傍山春の空背に姿静けし
 飛鳥駅壱阪山駅いにしえに誘いやまぬ駅の名続く
 あくがれてひととせ見送りようように桜を仰ぐ吉野のさくら
 ことごとく谷へ散りゆくさくら花あくがれ来たるにその気配なし
 友とわれ病い持つ身の別れ際明るき声に「また会いましょう」
 帰り来て次の予定をメールするもみじの頃に柳生の里で

白子れい

出湯

・洛

有り難しああり難しわが茶会社中のころろひとつとなりて
 席主せし疲れ癒せと出湯での歌会を計画なしくるる友
 とおろりとせる有馬の湯に浸りたりころろも身体もとろりとけ込む
 バスの旅出湯にひたり馳走食み短歌楽しみて疲れ癒さる
 土産物ならべる店に聞きなれぬ言葉とび交う外つ国びとの
 梅ならで桜に驚ホーホケキヨ藤の花房はやも揺れおり
 この地球に異常のつづく日々にして花も小鳥も人も狂うか

ばばりょうこ

個性集団

・鹿

うたを詠む集いの間に きょうこはも ざしきわらしの如くちんまり
 ひかえめにされと言葉を選びいる しずの 声音は ふしぎな力
 やわらかな笑顔の底いに秘められた百号の絵画 かすよの 力量
 いかんなく個性を發揮たとうればサンチャゴ巡礼いくたびも じゅんこ
 首長き なおみを斜に眺めてモデリアニに似たるとふいにおもえり
 ちゃめつ氣にうた会は苦手と笑いつつも ときえは会計をこなしていたり
 夫とは駆け落ちなのと爽やかにロマンを今だに曳きいる ゆうこ

浜谷 久子

水族館

・地

福田 庸子

立羽蝶

・今

見つめいる一分間を消えていく虹の幽明おどろの空を
こんなにも暗い虹もあるのだと光芒はかなく残像さがす
目的語持つ文章の重たさに花の色など伝える一首を
子どもだった友との齡いつのまをあわあわと来て夕日が赤い
水族館さかなを見るときもなく眺めただそれだけの京都遊びは
七日ごとの一首メールに記される「既読」に友の息づかい聴く
児の声に見上げる満月皓皓と友の平癒をひたすら祈る

浜本 芙美

原画

・夢

童の画きしポスター原画の解釈についてゆけない自分に行む
若き二人の仕種のかたえ「いいなあー」の笑顔のコマーシャルの技
人なつっこい保育児の柔らかな手の温み残る春の並木道
側溝の中より地上に立ち上がり春をのぞくかあらくさ一茎
適当な距離を置きつつわれら夫婦を目守りくれる有り難きかな
啓蟄をすきても気温定まらず地中の虫らも戸惑いていん
ミニトマト一粒ごとの味ありて爽りの場所を描きつつ食ふ

檜垣 美保子

新緑

・昴

三階の窓枠の空の劇場にしゃぼん玉ひとつ上手より入る
おさなごの吹きおわりたるシャボン玉木陰のみどりの斑に濡れて
女の子ピンク花柄安易なる選択のカップを拒絶する孫
立て膝の膝ぶつかっても笑いあう八歳と八歳と五歳と三歳
わけもなく歌ってしまう跳ねてしまふ笑ってしまう三歳のからだ
ハナミズキ花散りおわり風の夕ふたたび舞い散るしるきはなびら
新緑にひそみたましい今日われに生まれ樹上の宿木見あぐ

命令に聞こゆると児童のひとつは改元のあやふさ核心を突く
代掻きの馬瘦せてをりあらはにも昭和時代の乏しさ映す
土の貌見えそむ根元雪原に光は強く春の日の山
雪原のまぶしき果てを弾ける光となりて飛ぶ立羽蝶
寒を耐へ弾けて空を切りゆくか鋭角に飛ぶ立羽蝶追ふ
やうやうに越したる冬ぞ光浴びて飛ぶすばやさは眼に追へず
光線の強き春日を撥ね返す力のままに飛び続けゆく

藤田 美智子

マリンバ

・新

野外ステージに奏でられるマリンバの音色が桜の若葉を揺らす
つきつきと子らの飛ばせるしゃぼん玉初夏の光を球形にする
棚の隅にくたりと腰を下ろしをり旅に求めしマリオネットは
その影を映したる壁に柿の木はくつきりと自分の姿を保つ
睡みあひし日日は戻らず封を切らぬままの手紙をもつことくるる
水底の石のぬめりなど思ひをり人のこころの読みがたき夜を
後ろに引けば前にとことこ歩み出すおもちやがくるる慰めもある

藤森 巳行

新しき時代

・銀

十連休予定も無くてテレビ見る旅番組は安曇野映す
安曇野の五月の風受け歩きたし道祖神の道妻の手を取り
昭和から平成を生き令和へと繋ぐ命の何と尊き
新しき令和を迎へる命なり零時を待ちて妻と乾杯
新しき時代を前に乾杯す昭和平成生き来し夫婦
新しき時代の平和折りたり令和元年五月三日
平成は戦争のない時代なり令和も不戦の歴史を築け

船田清子

行く春

・天

松永智子

かけ

・嵐

汝に次ぎわれも歌集をと励めども眼かすみてほとほと疲れ
参考になるやと紀行も上梓せむ想ひに重し写真の挿入
上梓など無理と諦め消し去りし旅の写真の霧散わびしき

昨日、今日注ぐ春光に花水木白き花びら炎立てつつ
つんつんと皐月のつぼみ競ひ合ひ今にも開かむ卯月のなかば

端正なる和心と見し山法師今年咲くやら咲かぬやら
再びをインドに旅すやと思ふまで一日の温度差きびし 行く春

牧雄彦

霧

・大

うねうねと赤土の道続く果て夕霧漂ふ村に入りゆく

朝六時霧の奥より聞こゆるは川の音またにはとりのこゑ

山あひの村にしあれば南国といへども寒し霧たちこめて

朝霧の中よりをみなの現はれて軽く会釈しまた霧に消ゆ

霧の朝焚火をすれば見知らざる人も寄りきてかたみに笑ふ

霧霽れて日の差す道を人はゆきナーニヤン村に生氣戻れり

日が差せばたちまち暑しゆうるりと猫は尻上げ背伸びするなり

松浦禎子

ベニスの商人

・羊

幼き日「ベニスの商人」にときめきめシャイロックはたポーシャという名

ユタヤびと排斥というは今ここの暗き路地裏にしむるおもいか

ユダヤびと囲うゲットーへも橋一つ渡し隔てし歴史をいまに

その遺体エジプトより運び祀りたるベネチアの守護なりサン・マルコ寺院

サン・マルコ寺院のファサード聖人のまなざし届く杖ひくわれに

サン・マルコはいかなる聖者とも知らずおろかな者として祈りたる

かなしみをさりげなく生くる人々のルチッラもひとりベネチア生れ

三浦好博

熱狂

・銚

野の果てに落つる夕日のあれよあれよ地球の自転のなんと速きを

熱狂とバッシングの波吾を襲ふ「元号令和」「ピエール瀧」と

保守的な意図反映とよくみてる新元号での欧米メディア

改元と新札発行エトセトラ改憲キャンペーンの予行演習

憲法さん大丈夫かなしつこくも改憲勢力の虐めにあつて

大切なことを落として生き来しかゴドーを待ちながら今に思ひぬ

「朝鮮の人」と呼びたりどうしても朝鮮人と云へずに来たり

宮本靖彦

上町台地吟行会

・凌

桜散る真田山辺にひつそりと兵の墓五千並びてゐたり

愛染堂桂の古木も芽を吹きて時代を重ね若き声する

古寺の枝垂れ桜の光の輪に吾は包まれ足踏み出せず

旧街の地下を潜りて上町の玉出の滝の水響きをり

吟行会歩みあゆみて茶白山巨木の樟今年も芽吹く

高層に囲まれ低き茶白山図面の城はまぼろしの方

大坂の古都をたどるは谷町線都、城、寺、兵の墓地など

三 好 聖 三

紋白蝶

・伊

ふいに飛ぶ紋白蝶に届かずに無念の猫は菜の花のなか
船体のCOSCOの文字に上海へ向かう船かと思う花冷え
日本は単一国家という嘘を思いつつ春の肘枕かな
俺よりもうるせえ輩が飛んでかハシブトガラスが軍機をあおぐ
人間を芥のように捨ててゆく時の狭間に人ひとり逝く
血管が生えるという一言にややに粟たつ眼科医の前
梅雨晴れや山毛櫨の根元で飯を食う万三郎の中腹の森

御代田澄江

火室

・茨

勝鬨を挙ぐる象に奮抱き静かに眠る様の大樹
真白に大根洗ひ持ち来たる娘の悲しみを我は識らずき
音楽好きの孫は警察官を自指すとふ驚きもあり納得もしぬ
火のやうな想ひを抱き山を駆ぐる親鸞が浮かび朝まで眠れず
寒き夜は具沢山なる豆乳鍋温まれどもほどほどがよし
持方の蒟蒻づくりの老夫婦平安千年の火室ひやまを守る
菅笠と蒟蒻守り火室守り平家の民の生業を継ぐ

茂 木

斌

茅ヶ岳

・埼

茅ヶ岳わが登りしは九年前歳は七十古希と思はず
山歩きいまはもつばら「は行」にてはあはあふうふうしてへるへろ
明治の末前島密のすでにいふ古希としたきを九十歳と
算段師横山某と刻まるを玉垣に読むその職や何
べんてるのニードルチップ0・3この書き味を今は離せず
「お疲れさん」夕べを閉づるチューリップひと声かけて雨戸をしめる
新大阪へ新幹線の指定買ふ十一号車12番E

もとむらしげと

新任挨拶

・そ

出会う子がみな挨拶をしてゆきぬ清々しけり朝の校舎は
初々しく新任挨拶してきたり春風らかなまなざしを浴び
教科書にインクの匂い残りつつ捲れば鬚の激石に出会う
漢文と古文を間違え入りゆきぬ子らは正しき教科書広げて
「月歩」という子の名が読めず一頻り子らが沸き立つ国語の時間
「先生、家族はいますか」と問われたり中学生は何思いしか
さくらちる樹下に座りて弁当を広げていたり新入生たち

八乙女由朗

ち ち

・柴

境内の作業をなすに「父」「父」とわれを呼ぶ百舌栗の木の上
異常気象およびし跡や木木の枝素直にあらざるものを整う
春耕の田圃に残る一枚が萱谷地となり風受け立てり
ルンペンに仕事のありて一雨の過ぎたる後の草取り専科
平成に捨て来し語意ぞ供養せん耳寒し「すこく」とか「に汚れて
「要介護3」なる妻は果てしなき旅続けんか決意あらたに
夕日いま蔵王連峰刈田嶺に落ちんとなして北へ寄りゆく

山 下 雅 子

さくら

・習

花冷えに桜はんなり咲きつぎて卯月の生日花に包まる
元号の醸す味わいししみと愛しむ日々きょうごに令和近づく
平和なりし平成終る卯月尽みなみだ雨降る音もなく降る
花終り卯月尽日平成より令和につづく行間深し
枝葉ゆれそのかけおどる裏通り検査待ちつつ風をみており
安静期の二か月過ぎてすんなりと立つ左足に熱き血走る
リハビリに正しく普通に歩くことこの単純が単純ならず

横田敏子

春の庭

・福

十連休夏日続きて家の周り花あふれ咲き遠出は中止
 オレンジの大山つつじ大輪のピンクのつつじ競うがに咲く
 友来る日待ちおりしことぼうさんの今朝くまやかに開き初めたり
 アマリリスこぶしのような蕾持ち日毎ふくらむ朝の楽しさ
 とりどりの花愛おしき春の庭蝶々となりてひと日たゆたう
 新緑の木々は若葉を広げつつ庭のおちこち押しくらまんじゅう
 歌ノート開けど今日も白きまま十連休は花愛でて終う

吉永惟昭

若葉

・熊

対岸は葉守の神を宿す樹々童に戻れとゆらく陽炎
 春泪若葉の匂い秘めしまま吹き抜けてゆく令和なる風
 紫陽花の若葉萌え出す 母の日の嫁の心緒を地植えしなれば
 語り継ぐ血のメーデーも遙か遙か友と隔つる牡丹落つる庭
 憤怨も捨てて耐えきし被爆妻詠み継ぎゆかな落穂摘むこと
 章歌天の師に侍りしは幾度ぞ眼裏に頭つは敲しき頬骨
 「金栗伝」著しし友の逝きたれば 素直に大河ドラマとして見ん

久我田鶴子

ほんたう

・羊

お土産に菓子折くるるはかつてなく考へてゐる先生の齡
 半分よりさらに減らしし鉢の数さくらさうのなかに笑まへる人よ
 泡盛を「はい」と渡して三十度が及ぼすちからをはかりてゐたり
 二人目の子のダウン症を三人目の出産につなげし友ありわれに
 十余年馴染んだ施設替へるにも迷ひはあると傍らのこゑ
 子に向かふ親のこころの（ほんたう）は知りやうもなく聞くのみにある
 薄情をクールといふや子なきゆゑ抜け落ちをらむことのかずかず

香川進の生きものの歌

9

田土 成彦

・なめくじらは白粉草の茎におりて水いっばいのからだ
 を運ぶ
 『甲虫村落』 炉屋の歌より

蛞蝓は海中の蛸や貝と同じ軟体動物の仲間だ。蝸牛などと同じ
 陸上生活に適応したものだ。よく似たものとしてはウミウシ
 と言われる海棲のものがあるがこれは色彩あざやか姿華麗なも
 のが多いが蛞蝓は極めて地味な容姿をしている。簡単に言えば
 貝のまま殻を着けて陸上に上がった蝸牛に対してより進化を遂
 げ殻を無くした生きものと言える。菜園や畑に多く棲息して作
 物を食い荒らすので人にとっては困った生きものとも言える。
 白粉草は通常白粉花と呼ばれているが野生でも腰々身近な存
 在でもある。「白粉草」という表現はたぶんその花時ではなかつ
 たからかと思われる。「茎におりて」は「居りて」か「降りて」
 か迷う表現だが、「降りて」であれば空から降りてきたことに
 なり、あり得ないことだが蛞蝓がどこから侵入したか予想外の
 処に見かけることがあるので、このような発想も可能だと思ふ。
 私見としては「降りて」を探りたい。「水いっばいのからだ」
 は見かけ上のことで、彼らも人と同じく生物学的にはほぼ七十
 %ばかりの水分を保有していると思われるが、あるいは若干多
 めかも知れない。あまり好まれる生きものではないが香川進の
 視線はこの生きものに対しても同じ高さの視線で対応している。
 生命を同じくするもの同志の哀感なのだと思う。

「地中海」の創立

佐久間 晟

昭和二十六年四月、前田夕暮の死去に伴い、御子息の透氏が後継となった。それに伴い、透氏の先輩たちは「詩歌」を去ることになった。香川進師もその一人であった。それで、親交の篤かった「国民文学」の山本友一、「鳥船」の千勝重次、それに当時師宅に同居していた、後に第一回安井曾太郎賞を受賞した画家・田中岑氏らと図り、新結社の旗揚げとなった。

従来の短歌結社のような、植物名は避けて、何か新しい名前の結社にしよう、という事で、それでは、全く異質の三者の結社ゆえ、「地中海」はどうか、ということになった。既ち、地中海は、北からはヨーロッパ文明が南下し、南からはエジプト文明が北上し、東からはギリシャ文明が西進し、それが地中海で渾然と融合し、新しい地中海文明を作り出した。まさに夕暮系、空穂系、遥空系の異なる系統の出身者が一体となって新短歌文明を作る。まさに地中海の名前に合致するのでは、という事だった。

後日談。「地中海」だから、海に関係する団体かと思われたのか、横浜港に係留されている「氷川丸」の保存会への入会案内が届いて、大笑いしたこともあった。

昭和二十八年五月、「地中海」は創刊されたが、五年経っても会員は七十五人だった。それで香川師の全国支社回りが始まり、私共の宮城支社も幾つかのグループに別れ、会員の増加に努めた。後に香川師が宮城支社においてになった時、松島で詠まれた歌、「湾」の名を頂き、私の会は「湾の会」と呼ぶようになった。

その頃、木下産商に入社したばかりの香川師の多忙ぶりは、エレベーターを待つ時間が惜しく、四階ぐらまでは階段を駆け足で上下したそう。その後も多忙は続いた。昼の仕事、夜は交渉、そして接待と。それで「先生は何時歌の勉強をするのですか」と尋ねたところ、「僕は朝だ、午前四時から六時までの二時間が歌の時間だ」とのこと。それでは私は、三時から三時間しようということで、三時起床、六時までの三時間を歌の勉強の時間とした。それは、今でも続いており、目覚まし時計が無くとも、午前三時には目が覚めるようになった。確かにこの時刻は、物音は無し、電話も来ないし、人も来ない、本当に独りの時間である。因みに就寝は、ニュースの終わった午後七時半である。床についたら五分とは起きていない。習慣とは恐ろしい。一番困ることは、団体が出掛けた時、朝の目覚めが皆と違い、カーテンを被り外を見ていること。

今月の二人

春を呼ぶ水

森田 孝子

亡き夫と雛を飾りし習わしの絶えて迎える七度の春

亡夫に逢いたき思い唐突に胸を衝き叫び出したき夕暮れのあり

霜白きさ庭の朝に露の藎二つ三つあり春のまたるる

額に収まる名画持たねど鄙に在れば野山の四季に抱かれており

猫の好む青草の種を蒔き終えてさ庭に三毛の来訪を待つ

僅かなる石塀の隙に芽吹きたるペンペン草よ近きぞ春は

しゅんらんの蕾わずかに膨らみて落ち葉を褥に里山の春

日陰つつじの群れ咲く谷を訪ね行く春を待つ日の風の寒さよ

三点支持の体勢を保ち登り行きて日光連山の白き峰見つ

アイゼンの爪噛みしめる雪の下に春待ちかねし水音響く

在るがままに受け入れくれし人の輪に解けゆくなり硬き心の

コーヒーの香の馥郁と漂いて残る余韻に歌会終わる

昨日脱ぎし重き上着を羽織る今日春の歩みの緩やかなれば

コーヒーの香に包まれて

平成の二十五年の夏の終わりに、夫は六十八年の生涯を閉じました。私にとって、まさに青天の霹靂と言える出来事でした。全ての光が消えてしまい、ただただ闇の中に踰るばかりの私でした。

その様な時、福田庸子先生が「歌会に戻っていらっしやい。」とお声を掛けて下さったのです。長い間休んでおりました歌の世界でしたが、再び地中海今市支社の門を潜らせていただきました。実に幸運な短歌との再会でした。

月に一度、先生のご自宅で開かれる勉強会の、一段落となる頃合に用意して下さるコーヒーの、馥郁とした香りに包まれ、泣いても笑っても在るがままの私をじっと辛抱強く見守って下さる支社の皆様の励ましを頂きながら、拙い歌を詠んでいるうちに硬く閉じていた心がゆっくりと解かれてゆきました。

「ご主人の事を沢山歌に詠んで下さい。詠む事が貴女を前に進ませてくれますから。」そのお言葉を支えに、私を暗い淵から明るい場所へと導いてくれた短歌と、全ての出会いに感謝しながら、一日一日を大切に、精進して生きようと思えます。

今月の二人

我が家族

永江 幹雄

長袖を妻カットせし七分袖梅雨の時分は心地よきかな
 孫ら去り夫婦で散歩の道すがら野辺の地蔵に初詣する
 妻ついにスマフォを使い始めてより夫婦の会話やけに賑わう
 気の重い夫婦喧嘩は卒業し軽いジャブ出しすますこの頃
 子や孫とモツ鍋つつく夕餉かなこの幸せを妻と分け合う
 この娘こらにもらいてありやと煩いしに暮には孫を四人連れくる
 ある時期は心通わぬことあれど孫連れくれば愛し娘よ
 二人目の孫できそうと娘この電話妻の応答輝いている
 娘が嫁ぎ書庫になりたる部屋の隅に漫画《タッチ》が数冊残る
 四十年前子と競いとりし土筆んぼこの春幼なに摘みとりてやる
 「可愛いね！」いわれりゃ悪い気はしない我がコーギーのモンローウォーク
 犬曳きて青葉溢れる公園に一服吸えど歌はいでこず
 犬逝きて一人散歩は寂しかり秋の青空なお寂しかり

私にとつての短歌の効用

趣味はと問われれば謡曲、詩吟そして短歌と言いたい所ですが短歌については未だ趣味とは言にくい所です。この「地中海」誌に毎月五首を送るのも四苦八苦の有様で楽しむどころか毎月ひやひやの連続です。そうは言っても短歌を始めてもう十年余り、何か良い所があるから何とか続ける事が出来たのだと思います。

ではどこに効用があるのでしょうか。
 元来ボーっとして大雑把な性格なのですが、短歌を読んだり作ったりしているうちに少しは自然や人間・社会の事を注意深く見るようになって来た事だと思えます。陽さしも雲も季節により様々な様相となり、花鳥風月にもそれぞれ名前があり、その名を覚えればしっかりと見るたびに観察をする、また人の表情も見逃さず記憶しておく、等々。短歌を作らなかつた時に較べて物事を注意深く観察する（尤も年を取つた事も大きな理由でしょうが）癖が身についたような気がします。
 あとの課題は早く沢山作れるようになる事です、これはこれでまた難しい事だと思えます。この為には絶えず心が前向きになつて安定していなければ、それがまた難しい。ああ何事も修行ですね。

◆今月の二人・森田孝子作品評◆

雪の下に響く水音

夫と雛を飾ることもなくなつて、七度目の春を迎えたという森田さんは、日光市にお住まいである。

・亡夫に逢いたき思い唐突に胸を突き叫び出したき夕暮れのおり

「亡夫に逢いたき」の初句は、下の句の「叫び出したき」にそのまま繋がってゆく。字余りになろうが、ここはどうしてもこの言葉でなければならぬ。その思いの、唐突であること、「叫び出したき」ほどの強さであること。夕暮れという時間帯も相俟って、ストリートに思いが伝わってくる。

・アイゼンの爪噛みしめる雪の下に春待ちかねし水音響く
アイゼンをつけて登る雪山。ぐっと踏み込んだ足の先。アイゼンの爪が噛んだ雪の下に、水音の響きを感じとっている。雪融けがすでに始まっているのだらう。「春待ちかねし」には、作者自身の思いが重なっているようだ。

・在るがままに受け入れられし人の輪に解けゆくなり硬き心の硬い心も在るがままに受け入れてくれた人々への感謝の念が滲む。言葉の流れが自然で、ふっくらとしている。後につづくのが歌会の歌であるのを見ると、硬い心が解けていったのは歌を通しての人と人とのつながりであったのかも知れない。

・昨日脱ぎし重き上着を羽織る今日春の歩みの緩やかなれば
三寒四温の頃か。昨日は温かくなつたと感じられて脱いだ上着を、今日はまた羽織っているという。そんなふうには、春が緩やかにやって来ることを受け容れている作者である。人生への対応についても通じるところがありそうだ。

◆今月の二人・永江幹雄作品評◆

漫画《タッチ》が数冊

評者・久我田鶴子

永江さんは、神戸市在住。原稿は「妻と二人で」で五首、「我が家族へ」で五首、「犬と暮す」で三首のまとまりだった。

・長袖を妻カットせし七分袖梅雨の時分は心地よきかな
長袖シャツに妻が手を加えて、七分袖にしてくれたただが、

そこには妻への「ありがとう」がしっかり現れている。

・気の重い夫婦喧嘩は卒業し軽いジャブですますこの頃

夫婦も長いつきあいになれば、喧嘩の力加減も分かるというもの。この頃は「軽いジャブですます」という。仲のいい夫婦であるにちがいない。

・この娘らにもらいてありやと煩いしに暮には孫を四人連れくる

「結婚できるのか、うちの娘達は」という親の心配は、杞憂に終わったようだ。年の暮れには孫を四人も連れてやって来た、とお父さんの笑いが聞こえるようだ。

・娘が嫁ぎ書庫になりたる部屋の隅に漫画《タッチ》が数冊残る

娘が結婚した後の空き部屋は、今や書庫になっているようだ。そこに見いだした「漫画《タッチ》」。その数冊の本によって、娘と過ごした日々がにわかには蘇ってきたことだらう。

・四十年前子と競いとりし土筆んぼこの春幼なに摘みとりてやる

子と競って摘んだ土筆んぼ。この春に摘み取ってやっている幼子はきつと孫なんだらう。あれから四十年！の思い一入。

まず何よりも花岡百子さんとの出会いが短歌との決定的な出会いであり、私自身にとっても新しい世界が開かれ広がるきっかけにも通じると思っています。当時私は離職して心のうちは悶々としていたところ、お世話になった方より紹介を受け、百子さんの所へお手伝いに行くことになりました。デイサービスのOFFの時大体週二回AM十一時～PM五時まで、百子さんは病後職を辞し一人暮らしから家族同居のため私の住む国分寺町へ移転されたばかり、お互い新人同士、昼食をつくり共にいただきテレビ相撲観戦、音楽、時々遠出（車椅子）気功、草抜きなどみどりに恵まれた広い空間にいてのびのびと自然体で勿体ないほど輝いた十年余でした。残念にも百子さんはお亡くなりになりましたが、ご恩は深く身にしみています。

ある時歌会があるから私も二首つくれと言われ、当時リハビリメイクで活躍されていた「かずきれいこ」さんのことを歌にしました。当日、地中海夢グルーブの浜本美美先生と社中さん達が食堂のテーブルに並びました。勿論私は門外漢で小さく窮屈に感じていました。終りになって月一回坂出公民館で例会があるから私のかわりに参加し

て欲しいと言われました。私はまた何を聞違ったか「ハイ」と言っていました。さすが私立高校の元理事長、その権威に圧倒されたかたまた神様の霍乱か、子どものころ学校で短歌にちょこっと触れて、ああ美しいと感じたこと、長じて詩作や俳句をたしなむ方々と仲良くさせていただいても字の不味さが強い劣等感となっていて異次元



の世界と全く意に介さなかった。そんな私に素晴らしい作品を生み出す先生、友に囲まれた幸運が今も続いて自転車に乗って一時間通うことはまこと奇跡といわざるをえない。皆さんの足を引っ張るばかりの私に先生は香川歌人新人賞へ投稿という名目で何年もの熱い個人指導をして下さった。し

かしながら真剣に学ぶ姿勢の欠けていた私は先生を一人占めしてコーヒーとケーキ付きのおしゃべりの方に夢中になって本当に先生には申し訳なかったと思っています。

一度だけ歌を止めたいと先生に申し出たことがある。花岡百子さんが亡くなられて、私も気弱く落ち込んでいた。花岡さんとの約束は守ったし、歌に何らの素養も土台もない者は歌を詠む資格はないと。しかしながら歌の道を長く柱として堂々と生きる先生の前では、戦わずして退却する。恥ずべき卑怯者は返上しよう、引き続き向上を目指し気持ちだけは前向き転換しようとしている。

子もなく気の多い私はいろいろトライして結局短歌だけが残っている。去年夏の終わりに夫を亡くした。ただ一人九匹の猫と共に生きている。思いもかけぬことに振り回されたり、思いがけず助けられたり発見の連続の毎日、「短歌につながれていて本当に良かった。」というのが素直な実感である。月一度の例会はしたわしく力を最高にもらえる所、何の取り得もない私に神さまからの最高のプレゼントと勝手に思っている。私なりの歌が出来ればいいなと明日に願うだけ。